慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカルド分配論特に地代論の研究（二）
Sub Title	
Author	島, 文献
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.5 (1915. 5) ,p.584(108)- 592(116)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150501-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカルド分配論特に地代論の研究（二）

島　文　獻

目次（二）

本論
總論
第一章　リ氏地代論の叙述
第一節　地代の意義
第二節　地代の發生と其高低
第三節　獨占的地代一名絶體的地代
第四節　地代と價格
第六節　地代と農業の進歩改良

本論、總論

リカルドの論述せる地代、賃銀及利潤學說の個々に就き、叙述と批評とを試むるに先ち、リ氏構想の全體に亘り、鳥瞰的に之れを窺ふは理會に便する所ある可きを信するものなり。依而「經濟原論」並に「影響」中に現はれたる彼の分配論の結構を要言する時は大體次の數句と爲すを得可し。

一、人口は無限に增殖する傾向を有し、其增加率は生活資料增加率より高し、又人口增殖は必然的に穀物に對する需要を喚起するなり。

二、土地は面積有限なるのみならず、豐度、地位に於て差違あり、且つ土地には所謂收獲遞減の法則行はれ、同一分量の資本、勞働に依りて生產せらるゝ農產物は次第に遞減するものとす故に優良地のみを以て需要に應する事不可能となり、劣等地の耕作を余儀なくせらるゝに及び生產費は遞增す。

三、生產費の增加は、穀物の相對價値を上昇せしめ、價格の騰貴となる。即ち、生產條件最も不利なる生產者價格を支配するものなるか故に穀價の決定せらるゝは最劣等地即ち限界地の生產費によるものなりとせり。リ氏は謂へらく地代を支拂はざる土地の穀價は標準となるを以て地代は穀價に含まれずと。

四、生產費の差額は、他面より見れば生產物の差額なり。余剩なり。競爭の結果、此差額は盡く土地使用者を離れて地主に歸屬す。即ち、地代を發生すと云ふなり。リカルドに從へば地代は土地性質の自然的差違に起因するものなり。

五、社會の進歩に連れて、愈々劣等地の耕作起るに從ひ、優等地と限界地との距離遠かり、生產物の產額大となる。他方に於て生產困難と共に穀價騰貴せるを以て、啻に穀物地代のみならず、貨幣地代著しく騰するに至るなり。又リ氏は農業技術の改良進歩は、土地生產力を增大し劣等地の耕作を廢止し、地代を減少せしむる效果あることを認むれども、其作用は一時的なりと見做し、終局的に收穫遞減の法則を防止するに足らずと爲せり（「原論」第二章三四頁以下、「影響」三七七頁）

六、全收穫より地代を控除したる殘額は分割せられて賃銀と利潤となる。而して此殘額を穀物として見る時は、地代の增加に反比例して減少するものなれども、貨幣額に換算する場合に於ては、穀物の分量に於て失ひたる所、穀價騰貴によりて償はれ、常に一定貨幣額なり。リ氏の揭けたる例にありては七二〇磅とす（「原論」一六二、六三頁）。於茲、利潤の高低は賃銀の高低によりてのみ決定せらるゝことゝなり、土地生產力の增減と利潤との直接關係は斷たれたるなり況んや、土地經營良否、耕作者の技能と利潤の關係に就ては一言之れに言及する所を見ざるなり。

七、リカルド分配論の眼目とする所は、人口增殖、穀價騰貴、地代上昇、利潤下向の相關關係の說明に在り。然れども地代上昇と利潤下向とは直接關係に立つものに非して、賃金論を介して兩者を連結するものなり。（是れ「原論」の編次

の上よりも推知せらる）即ち、地代の騰貴は直接利潤の下落を起すものに非れども、地代を上昇せしむると同一原因たる穀價騰貴は、賃銀を上騰せしむるにより、利潤下向するものなりと說く、故に茲に一應リ氏賃銀論を吟味するの必要起る。

八、リ氏の賃銀論は所謂賃銀鐵則と稱せらるゝ所のものにして、勞働の供給は需要に超過する傾向を有するを以て、賃銀は常に勞働者生活維持可能の限界線にあるものなりと。故に穀價騰貴に際しては Nominal wages は少くとも之を引上ぐるを要す。（是れ生活限度以下の賃銀は勞働階級の破壞を意味すればなり）。其結果として七二〇磅の中賃銀と化する割合遞增す。（「原論」第五章五〇頁以下、六三頁）

九、穀價騰貴從て起る賃銀値上げは必然的に利潤の減少を來し、社會の進歩と共に此勢は助長せられ遂には利潤率が下降するのみならず、利潤の絕對量は減退するに至る。（「原論」六九、「影響」三七四頁）

十、リカルドの利潤論に於て說述する所之を二法則に一般化するを得可し、一は平均利潤率の法則にして、他は平均利潤率下降の法則とす。前者は營利の衝動、轉業並に資本移轉の自由なる前提の下に成立し、後者は穀價騰貴、賃金上騰なる假定より演繹せる所たり（「原論」四七、五六、六六、一七四、一七六、「影響」三七二、三七七、三八〇頁）

十一、然るに利潤率の高低と資本蓄積の速度とは正比例を爲すものにして、資本の蓄積は勞働の需要を喚起し、農事の改良進歩を促かし、有限の土地と無限の人口との調和を計る所のものたり。故に利潤の減少、資本蓄積度の減退を以て國家社會の最大病患なりとの見解を抱くに至れり。

十二、リ氏は社會階級間に利害衝突し分配の不平均激成せらるゝは、土地收穫遞減に原因する穀價騰貴に基くものなりとせり。されば氏は穀價を低廉ならしむるを得ば、萬事解決するものなりと爲す所以にして、斯くして案出せられたるは彼の穀物自由貿易論なり。

十三、地代論に於ては輕微の差違を除き大體同一意見に歸着したるマルサスは、保護貿易論者と爲り、リカルドの自由貿易論者と化せしは、食料品を外國市場に依賴すと危險の有無に就き兩氏見解を異にしたる結果と見るを得可し。リ氏は輸入杜絕は輸出國に對しても不利甚しきものなるを、以て戰爭の場合と雖も憂ふるに足らずとなし、穀物條例廢止によりて英國本土の農業は却て繁榮するものと思惟したり（「影響」序文リ氏著 On Protection to Agriculture. 1822. マッカロック版四五三頁以下）。

以上を以てリカルド分配論の略述となす。一見して明かなるが如く、リ氏は純理論の範圍を脫して政策の領域に入り、著しく、當時の時事問題の影響を蒙るものなることを看取し得可し從てリ氏の眞價は一片の學理と見ずして彼の生時の實際問題と照合するにより初めて之れを了解し得るものとす。

第二章　リ氏地代論の叙述

第一節　地代の意義

リカルドは地代に關する眞正の理論を知らざれば、經濟學を談ず可からすと揚言するものなれども、吾人は之れに與すること能はず。只吾人は何等の危險を冒すことなく立言し得可きはリ氏地代論を解せすしてリ氏分配論を語る可からすと云ふにあり、故にリカルド分配論を究明せんとする者、先づ之れを地代論に始めざる可からす。

緖論に於て已に一言せしが如く、リ氏の價値原則に於て、相對價値を決定するものは、獨り消費せられたる勞働量なり。資本の蓄積起るに

及びて、勞働價値原則は多少の修正を要すれども、資本は固是れ過去勞働の產物なるを以て之れを勞働に換算し得可く、要するに原則は依然として資本ある社會に適用す可し。然るに土地私有財產制度行はれ地代の存在する社會に於ても、尙此原則は適用せらるるものなりや。即ち生產費（賃銀と普通利潤）に新たなる要素は加算せられ、從て價格は變動を來さすや（「原論」三四頁）。

此問題に對する解決は、彼の有名なる地代論にして、リ氏は全然否定的立場より地代を論究し、私有財產たる土地使用の報償は、地代を生するものとなせども、普遍的地代の存在を認容せす、土地生產物に差額ありて初めて地代を支拂ふを以て、價格の結果なれども原因ならずと斷定せり。即ち、リカルドは土地私有制度の下に於ても、勞働價値原則は何等の變更を要せずして其儘適用す可しとなし、スミス一派の地代論に亦賃銀、利潤と同じく生產費を形成し、價格の要素なりてふ說に極力反對するものなり（「原論」四〇頁）。

リ氏の與へたる地代の定義は左の如し。

Rent is that portion of the produce of the earth which is paid to the landlord for the use of the original & indestructible powers of the sail. （〔原論〕三四頁）

The term rent of land, as I have elsewhere observed, is applied to the whole amount of the value paid by the farmer to his landlord, a part only of which is strictly rent. （〔原論〕一〇二頁）

Rent is the sum paid to the landlord for the use of the land, and for the use of the land only. （〔原論〕一〇二頁）

By rent I always mean the remuneration given to the landlord for the use of the original and inherent power of the land. （〔原論〕三七五頁）

之れを摘要すれば左の二命題となる。

（一）地代は土地の固有不可壞なる力の利用に對する對價なり。

（二）地代は土地使用者が地主に對して支拂使用料なり。

（一）土地の固有不可壞なる力とは果して何ぞや。リカルドの之れに對する內容の說明は十分明瞭なりとは云ひ難きも、全體の論調より推するに、面積、豐度並に地位の三者を包含するものゝ如し。而して普通地代の名目の下に地主に支拂はるゝ對價中、利子、利潤に相當する部分往々あるものなれば、此等は本來の意義の地代と峻別せざる可からずと主張するものなり（「原論」三四、「影響」三七五頁。）但しリ氏は一の例外を認め、土地の改良に投下せられたる資本にして若し、土地の生產力と不可分的に融和したる場合は元來は資本の對價なれども、地代の性質を帶ぶるに至るものなりと、然れども耕作に便する爲の建築物の如き、臨時の設備は土地生產力とは直接關係無く、從て之れが對價は地代と異なるものとせり。（「原論」一五八註）

（二）、地代の定義の後半は、地代は土地使用者が地主に支拂ふ使用料なりとするものにして、此一事を以て見るときはリ氏は地代を論するに當りて借地制度を前提とするものと云ふ可し。然れども氏の態度は終始一貫するものに非ず。例ば借地制度なき時代に於ても、土地は或條件の具備せらるゝ場合は地代を發生するものゝ如く說明するを見る。是れ畢竟、土地生產力の差額は地代なりてふ所謂差額地代說の理論的纏繹より來る當然の歸結なる可けれども、土地所有者自ら耕作に從事する場も、借地人によりて耕作せらるゝ時も同じく地代ありと云ふに至りては彼の與へたる定義の後半は甚しく薄弱とならら

ざるを得ず（「原論」三六、三七、「影響」三七一、三七五頁）。

第二節　地代の發生と高低

アダム・スミス一派の唱道せし從來の分配論に於ては、生產三要素に對し、三所得ありと爲すものなりしが、リカルドは之れに反對して地代の普遍的存立を否定し、理論上限界地には地代無しと主張するものなり。即ちリ氏に循へば地代は全く土地生產力の差等より、自然的に發生する余剩にして、不勞働所得なりと見做すものたり。今リ氏の差額地代發生條件を上ぐれば次の如し。

A　豐度の差違（「原論」三六頁）。

B　地位の差違（「原論」三六頁）。

C　投下資本の多少（「原論」三七頁）。

以上の三條件の大前提を爲すものは土地面積の有限性（「原論」三五頁）にして、リカルドの地代學說は、有限の土地、無限の人口なる二大柱石の上に築かれ、地代は社會進步の行程中、歷史的範疇に屬すと爲すものたり。而して其根本觀念は、土地には收穫遞減の法則行はると見做すに由來するものにして、此根本觀念に立脚し、抽象的論法を以て、土地には農業の改良、進步なく、人口と資本とは正しき比例（In proper proportion）に於て進展するものと假定したり。リ氏に從へば、地代の發生するは、土地生產力の差違に原因して生產物に差等あるが爲にして、又地代の高低は優等地と劣等地との距離の大小に比例するものなり。（「影響」三七二頁）

第三節　獨占地代、一名絕對的地代

リカルド地代說の中心は固より差額地代にあれども、彼は此以外、獨占地代を認むるものなり。例ば彼の假定にして眞なりとせば、人口增殖に伴ひて次第に劣等地の耕作起り、遂には一國の全土擧げて耕地と化するの時期早晩到達す可し。斯る狀態に於ては、農產物は一種の獨占性を有し來り、限界地即最惡の土地にも亦地代を發生するに至る事は、リ氏の理論上認むる所たり。然れども彼は、當時の實際土地經營の狀態より之れを判斷して、尙未だ、土地は極度に利用し盡したりと云ふ可からずとなし、獨占地代の現出は、遠き將來の問題たるが故、今日は專ら差額地代の論究す可しと唱ふるものなり。

如斯特異なる場合を除き、普通の場合に於てリ氏は獨占時代を認めざるなり。其論據は、農產物も亦工業品と同じく、自由に再生產し得るものなるを以て、其價格は生產費によりて決定せられ、何等獨占性を有せざるが故に、地代は穀價に影響するに至らずと爲すに在り（「原論」一五〇、一五一頁）。

第四節　地代と價格

「原論」並に「影響」中、地代と價格との關係に就き、リ氏の論述せし所を取り次の數項となさん（「原論」三八、四〇、二四四頁、「影響」三七一、三七五、三七七頁）。

一、價格は生產費によりて決定せらる。而して穀價は最劣等地、即ち、限界地の生產費によりて決定し、穀價中に地代を含まず。

二、穀價騰貴する爲に劣等地の耕作可能となるものなり。故に價格は原因にして地代は結果なり。換言すれば、地代は價格に影響すること無く、價格は生產に要する勞働量の多少によりてのみ定まる。即ち、價格を影響するものは結局收穫遞減の法則に外ならず。

三、地代は新たに所得の發生したるものに非ずして、已に發生せる價値の一階級より他階級への移轉に過ぎず。又地代は交換價値の增大を意味するものなれども、其自身富に非ず。只社會の進步と共に地代上昇するものなる故地代は富の表徵と見做す可きものなりと、

四、地代は穀價騰貴の結果にして原因に非ざるを以て、地主之れを放棄するも、借地人の利潤

を增すのみにして、穀價の下落を來すものに非すと說くものなり。リ氏にありては地主階級あるが爲に、地代騰貴するに非すして、穀價騰貴てふ自然の大則の結果に歸するものなり。要するにリカルドの主張の存する所は、地代は價格騰貴の結果、發生したるものにして、生產費中に計上せらるゝ事無く、賃銀、利潤を控除したる殘額なり、余剩なりと論結するものなり。

第五節　地代と農業の改良進步

リ氏は決して農業の改良進步が、生產力增進に及ぼす效果を輕視するものに非す。否資本の重要なる職分は、無限の人口、有限の土地の調和劑たる作用にありとなし、資本の充用は農業技術の改良進步を促進せしめ、少量の勞量を以て多額の農產物を生產し、價格を低下して消費者全般に利益するものなりと。即ち、土地生產力增大する時は、穀價下落し、劣等地耕作の廢止となるものなり。從而地代下降し、利潤上昇し以て資本の蓄積を增ならしむるものなりと（「原論」四一、四二頁）

然れども彼は土地改良進步の效果を無制限に樂觀するものに非すして土地收穫遞減の法則を一時停止するに止まるものなりとせり。即ち農業技術の改良進步により惹起せられたる利潤の上昇、資本の蓄積は、勞働に對する需要を增加し、茲に人口增殖を見るものなる故、遂に再び穀價の騰貴となる。地代は一時下降して地主は不利益を蒙ることあるも、結局する所、却て人口增殖により穀物に對する需要を擴大するものなり。他面に於て技術上の改良、發明等は一層劣等なる土地の耕作を可能ならしめ、地代騰貴の勢を再現するものなりと（「原論」四三頁註、「影響」三七七頁註）

要するに、生產力の增進はリカルド分配論の全體より見て、一時的第二次的地位を有するに過ぎすして、常に生產力の遞減を前程とするものなり。此觀念は、賃銀、利潤を論するに當りて、特に著しく現はれ、勞働の生產力と賃銀、利潤とは全然沒交涉なるかの如き觀を呈するに至れり。如斯前提は經濟界實際の事實に反する事大にして、從て之れより演繹せられたる彼の分配論の大部は空論たるに終れり。（未完）

批評と紹介

福田德三著『改定經濟學研究』

大正四年三月東京同文館發行
菊版乾坤二卷一二八二頁定價五圓

本書は著者福田博士が去る明治四十年中に上梓せられたる「經濟學研究」を改訂增補して更に此回刊行せられしものなり。載する所は博士が過去十數年間に於て試みし研鑽討究の成果にして、其研究問題には經濟單位發展史論あり、商業道德觀ありツアドルガ（組合）論あり、アグラリウム論あり、ダイス論ありコレギア論あり、丁稚論あり、カルテル、テカリー論あり、ユストム、プレチウム論あり、企業心理論あり、工場法案觀あり、シンヂカリズム論あり、マルサス論あるの外數十篇を數へ、殆んど經濟學の全 segment に亘れるの觀あり。從つて本書は終始一貫せる著述には非ざれども、著者は此數十篇の論文を系統的に分類編聚して前後六篇とし、其中三篇は之を乾卷に收め、他の三篇を坤卷に分載せり。乾卷の三篇は題して「經濟單位發展史研究」、「經濟史雜考」並に「根本概念雜篇」とし、坤卷に收めたる三篇を「基督教經濟學批研究」、「企業勞働及社會問題」及び「マルサス及リカルド研究」と名命せり。

本書の前身たる「經濟學研究」は既に洛陽の紙價を高めたる名著にして、其眞價に就きては吾人の喋々を要せざる所なり。されど、此前身に親むの機會を得ざりし讀者に對して吾人は本書が――未成未熟の書なりとの著者の遜讓的序言ありとは云へ――內外の經濟學者の筆に成る此種の著述中に於て最 Scholarly なるものゝ一に數ふ可く、又本邦人の手に成る同種の書物中に於ては最も crudite なるものたることを告げんと欲す。博士の博識學殖ありて始めて斯くの如き magnum opus. を完成することを得るなり。幾百幾千の讀者中には或は著者の觀察、斷定に對して異議を挾むものなしと云ふ可からざる可きも、幾分にても經濟學的感受性を有する者にして、本書の精讀に依りて刺戟を受けざる者はあらざるならん。然も本書は既に世に定評あり、吾人の紹介の如きは畢竟蛇足たるのみ。

古仁所豐著『最近獨逸產業の發達』

大正四年三月大倉書店發行
菊版二七七頁定價一圓廿錢

獨逸帝國が昨年八月歐洲の列强を敵手として宣戰を布告せしより既に九ケ月、此間其の完備せる交通機關を妙用して朝に四を伐ち夕に東を討ち、未だ敵をして殆んど一步も國內に侵入するを機會を與へざるは其陸軍の組織訓練の優秀なるの事實に職由せずんば非ざるなり。由來獨逸が陸軍の精銳を以て知らるゝ